

平成20年度

甲子園監督研修報告書



平成20年度甲子園監督研修報告

常任理事 寺澤 誠一

第90回記念大会の熱戦が繰り広げられる甲子園球場を中心に、今夏で11回を数える監督研修が下記日程で行われた。西條前常任理事から世話係を引き継いで4度目の甲子園研修であるが、何とも言えない甲子園の魅力を参加するたびに感じる事ができる。

研修二日目、井本 亘日本高野連主任の案内による球場施設見学の際、リニューアル中の1階通路内に新設された部屋で行われた青森山田と日本航空のオーダー交換に、奈良井常任理事の計らいにより立ち会うことができた。緊張感に包まれた両主将の真剣な眼差しは言うまでもないが、西貝球審の主将への言葉がとても印象的だった。また、研修最終日の鹿児島実業の練習見学では、ひたむきではつらつとした選手達の動きに高校野球の何たるかをかいま見た思いであった。

今回は松商学園の試合が研修二日目に行われたため、心齋橋の県代表宿舎に宿泊したが、少しでも宿舎の様子が分かってもらえたら幸いである。

最後に、例年のことながら本研修実施にあたりご尽力いただいた朝日新聞斎藤長野総局長、選手権大会の本部員としてお忙しい中、格別のお計らいをいただいた奈良井常任理事を始め連盟関係者に深く感謝申し上げたい。

1. 期 間

平成20年8月4日（月）～6日（水） ー2泊3日ー

2. 場 所

阪神甲子園球場（兵庫県西宮市甲子園町）

つと
津門中央公園野球場（兵庫県西宮市津門住江町）

3. 内 容

4日	試合視察	浦添商業	ー	飯塚
		千葉経大付	ー	近大付
5日	球場施設・設備見学	オーダー交換・インタビュー・ 理学療法士サポート		
	試合視察	青森山田	ー	日本航空
		慶応	ー	松商学園
6日	練習視察	鹿児島実業		
	試合視察	清峰	ー	白鷗大足利

4. 参加者

西澤敏英（北信支部 須坂商業） 細田和宏（南信支部 茅野）
柳澤 仁（中信支部 白馬）
両角亮介（本県連盟常任理事 監督部会）
寺澤誠一（本県連盟常任理事 責任者）

第90回全国高等学校野球選手権大会

甲子園研修レポート（8月4日～8月6日）

長野県須坂商業高等学校

西澤 敏英

甲子園研修は、感動の多き3日間になった。

甲子園には、試合見学に生徒を連れて何度か来ているが、やはり、ここで生徒に野球をさせてやりたいと、強く感じた。そして、勝って校歌を歌いたいと。

130km から 140km 台の速球を投げ込む投手、それを引き付けて軸を回転させて打つ打者、金属バットが芯で捉えてヒット性の打球が飛んでいく、その打球を難なく処理する内野手、どれも甲子園では当たり前前に繰り返されるプレーなのだが、いざ、我が須商のグラウンドに戻るとどれもがスーパープレーになる。テレビを通しては感じる事ができない実物大の高校野球の全国のレベルを肌で感じる事ができた。

どの選手も臆することなく自分の力を発揮している強さと、チャンス、ピンチにおいてもどこかに余裕すら感じさせる落ち着きがあった。それは、地方大会は負けると甲子園に来ることはできない。しかし、甲子園は、憧れの夢の舞台、最高の場所、そこでプレーをしていることを味わっているかのように見えた。目の前でプレーをしている選手に対してあらためて敬意と強い憧れの気持ちを持って試合を見た。

今年の夏は、信州もかなり暑いが、大阪の暑さは気温ではなく、その湿気だ。とにかく蒸している。スタンドで見ている時には、まるでサウナに入っているようで汗が滝のように流れて止まらなかった。3日間の大阪滞在のなかで体験したことは、甲子園の暑さのなかでプレーをすることよりも、甲子園で勝ち上がっていくためには、大阪という信州では経験のない暑さの中で、試合までの日程を過ごしていく体調管理とモチベーション維持こそが大切だということだ。

一日目 8月4日

浦添商

甲子園到着後、最初に見たのが、浦添商(沖縄)対飯塚(福岡)の試合。好投手伊波君を見ることができた。アルプスの応援幕には、「凡事徹底」「闘志前面」とあり、グラウンド内では、全力疾走。2アウトからのフライを抜かない、カバーリング、両手捕りでの内野のボール回し等、浦添商の野球は基本に忠実だった。

3回表の浦添商の守備で、0アウト一塁、バントのケースで、バントの構えからの見逃しは、捕手の山城君は全てファーストにけん制球を投げて、余計なリードをさせない。いざ、バント処理においては投手の伊波君は、正面ではない、一塁側のバントにもかかわらず迷わずにセカンドに送球してアウトを取る。その後、バントの失敗で入れ替わったランナーのスチールを捕手山城君がきっちりと刺している。送球の時間は2秒1から

2 台。全く攻め入るスキが無く、積極的な守りだと言える。翌日の新聞には、伊波君は、無四球、無三振の歴史上 2 人目の好投だと報じられていた。140km 台のストレート、アウトローヘスライダー、タイミングを外すカットボールを組み合わせての低目への丁寧なコントロールには、その凄さを感じた。

その後も、浦添商の試合は注目していた。

8 月 14 日、浦添商対関東一の試合、関東一を 3-1 で破った時の投球内容と、ランナーを置いての投球術は完璧だった。長く持ってスタートをなかなか切らせない。バントのケースでは、捕手の構えた高めに投げて小フライを上げさせて一塁ランナーのスタートを遅らせてセカンドでアウトを取る。捕手の山城君は 2 塁へのスチールを 3 度刺し、関東一の自慢の足を封じた。

二日目 8月5日

3 試合目に松商学園(長野)対慶応(東神奈川)の試合が予定されていた。この日は日本高野連の井本先生の案内で一部リニューアルした甲子園の球場内を見て回ることができた。室内練習場、ストレッチルーム、インタビュースペース等。松商の前のゲームは青森山田対日本航空の試合で、日本航空の中澤学監督は、篠ノ井高校の OB。室内練習場でアップをする航空の選手と中澤先生に激励の挨拶ができた。さらに幸運なことに青森山田と日本航空の先攻後攻のトスに立ち会えた。ストレッチルームを使用して、先攻後攻のトスを行う。室内には長谷川(青森山田)主将、北野(日本航空)主将、両校野球部長の他に日本高野連役員、青森・山梨両県高野連理事長が同席する。

進行は西貝主審が行った。西貝主審は、両主将との握手の後に、きょうは精一杯主審を努めるので君たちも力の全てを出してプレーしてくださいとエールを送った。そのエールのなかに、

- ・プレーをするお互いを敬う気持ちを大切にしたい ; それ FRIENDSHIP。
- ・野球のルールに沿ってプレーをして欲しい ; それ FAIR PLAY。
- ・そして力の全てを出し切って欲しい ; それ FIGHTING SPIRIT。

と高校野球の精神である 3 つの F の話があった。最後にもう一度両選手と握手を交わした。機械的とも言える分刻みで動いていく甲子園という時間の中で、選手の健闘を祈る一審判の姿勢に感動とも言える爽やかなものを感じた。

松商学園対慶応

松商先発の林君も、他校の投手に負けず 140km 台のストレートを投げているが、この日はカーブが低めに決まらずに、ストレート中心の組み立てになっていた。そこを 2 回につかまり 4 失点の原因になった。しかし、その後の 3・4 回の失点は、気落ちしていた中での失点であり防げる点だったように思う。リリーフした伊東君が緩急を使い分け慶応打線を抑え、さらに松商の後半の追い上げがあっただけに残念な失点だった。

三日目 8月6日

練習見学（鹿児島実業）

甲子園の近くにあるグラウンドで練習をしている鹿児島実業の練習を見学した。礼儀の正しいこと、声の出ていること、きびきびした動き、Tシャツではなく胸に名前が書かれている練習着等、一目見てこのチームの求めている野球がわかった。ブルペンでは、岩下君、松窪君両投手が投球練習をしていた。雑誌によると背番号 10 だが岩下君が主戦のようである。両投手とも 140km 以上の球速は出ていた。投球フォームは松窪君がきれいだが、打ち難らさと球威では岩下君だ。鹿実というチームの試合も楽しみになった。

甲子園のライン

須商の生徒には、「目指している甲子園に引かれているラインと同じラインを須商のグラウンドにも引けるようになりなさい」と話している。

その甲子園では、試合が終わるたびに、甲子園職員の専門の方によってグラウンド整備が決まった順序で進められていた。ラインを引く作業は、例えば一塁ファウルラインは本塁から一塁方向へ、一塁から本塁方向へ2輪のラインカーで同時に引き始めそれがピタリと一本の真っすぐな線になる。ラインが引き終わると、置いてあるメジャー（ひも）を両端で同時に引き上げる。もちろん真っすぐに引いたラインが乱れないため。

以前、前任校で監督になったばかりの頃、信州工業（現武蔵工業）の大輪先生に迷惑を承知でお願いをして、何度も一緒に練習をさせていただいたことがあった。その時に、「グラウンドにはそれぞれ係が決めてあり、それぞれのプロになるようプライドを持ってその仕事をするように」との話があった。このことを思い出しながら甲子園のラインが引かれていく様子を見ていた。

最後になりましたが、一緒に甲子園に同行して頂いた、寺澤先生、両角先生にはご自分の生徒の指導もあるお忙しいなか、本当にありがとうございました。また、今回の研修に参加した細田先生、柳沢先生とそれぞれの学校の情報交換をしながら、野球に対する情熱を確認できた有意義な3日間になりました。また、大阪滞在中に長野県代表の試合もあったことで、県理事長の小山先生を始め、県内4地区の理事長先生、丸山県審判長とも有意義な時間を過ごすことができました。この研修は、他のどの県でも実施しているものではない貴重な機会であるとお聞きしました。甲子園での観戦のみならず、甲子園球場の舞台裏、また、出場校の練習風景等、見るもの全てが勉強になるものでした。素晴らしい研修をさせていただきましたことに、心より感謝申し上げます。今後もこの甲子園研修が、県内の高校野球関係者の意識の向上を図る機会になればと思います。

平成 20 年度甲子園監督研修に参加して

茅野高等学校野球部 細田 和宏

8月4日～6日にかけて阪神甲子園球場での研修に参加しました。今までに甲子園は野球観戦に何度か訪れたことはありましたが、今回は甲子園の施設や、大会がどのように運営されているかなど様々な視点から高校野球を見ることができるということで大変心待ちにしていました。

初日は、第三試合の沖縄県代表の浦添商業と福岡県代表の飯塚の試合を観戦しました。普段は立ち入ることができないバックネット裏横のシートでの観戦は、投手の球筋、打者のしぐさ、ベンチの雰囲気等を体感することができ、体格をはじめ、選手の声、スピード感などやはり甲子園にでるチームは違うなあと感じました。特に印象的だったのは、浦添商業の選手でした。沖縄のチームらしくグラウンド内でも明るく爽やかで、走・攻・守すべてにおいて躍動感があり、観戦している私たちを楽しませてくれるチームでした。この試合は結果的には浦添商業が7対0と大差で勝ちましたが、両チームとも力量の差がなく、安打数もあまり変わらないのに、いかに大舞台で自分たちの力を出せるか出せないか、一つの好機を得点に結びつけることができるか、野球というスポーツの難しさをあらためて実感しました。第四試合の千葉県代表の千葉経済大学付属高と南大阪代表の近大付属高の試合も途中まで観戦しましたが、両校とも投手が要所を締め、緊張感のある投手戦でした。初日からとてもレベルの高い野球と、強いチームの雰囲気を目の当たりにできました。

どの試合も同じことが言えるのですが、どの高校も外野の守備位置がプロ野球並みに深い位置に守っているのが印象的でした。甲子園に出場するチームともなれば、135キロ以上の速球を投げる投手、その投手をさらに鋭いスイングで打ち返す打者、その打球の速さ、打球もよく飛びます。しかし、深い位置に守っているからといって、浅いフライも外野手があっさり捕ってしまいます。打球の判断、一歩目の速さなど個々の身体能力の高さを間近に見ることができました。また、選手ひとりひとりが出している声、野球選手の声は何回聞いても気持ちいいものです。ただ大声を出すだけでなく、より響くように、自分を奮い立たせるため、気合いの入った甲高い声を出します。日頃からこのような声を出した気合いの入った練習をしているのを感じるとともに、選手たちの勝利への執念を感じることができました。

二日目は、様々な球場の施設を見学することができました。最初に選手が試合を終えて引き上げてくる通路を見ました。よくテレビで目にする場面で、カメラのスタンド位置も決まっていました。次に球場内にある雨天練習場へ案内してもらいました。そこでは青森県代表の青森山田高がアップをしていました。ストレッチやラダートレーニングを行っている一方で、大会関係者による金属バットのチェックも行われていました。グリップの部分かなり入念に確認していました。滑るグリップはその場でテープの巻きなおしを指示していました。また3塁側の雨天練習場では山梨県代表の日本航空高がアップをしていました。3塁側の雨天練習場はかつてプールとして利用されていた話も聞きました。いまだに飛

び込み台部分が露出していました。練習場の奥にはレントゲン室が設置されていました。内、外野手を含め投手をする機会のある選手は必ずレントゲンで肩、肘の診察を受けて医者の許可を得なければならない旨の話をしてくれました。このレントゲン室は75回大会の時、沖縄水産の投手が連投で投手生命を絶ったことを機に設置された経過があり、それ以来投手の身体管理をするようになったそうです。今回の第90回記念大会に至るまでにあっという間いくつかのエピソードも話してくれました。今治西高の藤井投手が疲労骨折をしていて医者が投げさせなかったこと、松坂は一日で疲労が取れる筋肉を兼ね備えている選手であり、体の筋肉の細かい部位、鍛え方も自分で熟知していた選手であったこと、福留は将来は「野球で飯を食う」と言っていて、志が高く自分で自分の健康管理ができていたエピソードなど話していただきました。その後勝利チーム、敗戦チームのインタビュー通路へ行きましたが、そこには報道関係者が忙しそうに出入りしていました。少しでも監督、選手の声を聞こうと詰め寄ってメモを取っていました。その後、控室で両チームはトレーナーの指導で30分くらいかけてクールダウンをします。折角の機会なので私たちもストレッチをやらせてもらいました。トレーナーは常に選手に水分を補給させながらストレッチをさせていました。その後、観客などと接することなく球場を後にするところまで段取り良くおこなわれていました。また、試合前の先後攻めの決定の場面を見学させてもらいました。日本航空高と、青森山田高の責任教師、大会主催者、審判代表それぞれが見守るなか両高校の主将が先後を決めました。その流れも細かく手順が決まっていて興味深かったです。主催者からの話、審判からの話は、フェアプレーについての大変良い内容の話でした。その日の第三試合は長野県代表の松商学園の登場ともあって再び試合を見学しました。この試合も実力差は無いものの、ミスが勝敗を分ける結果となりました。相手チーム神奈川県慶応高校の勝気な姿勢がとても印象に残っています。

最終日、甲子園出場校の練習を見学しました。津門中央公園球場で鹿児島県代表の鹿児島実業高の練習を見ました。普段九州のチームを間近かで接する機会がないので、普段の練習での姿はどのような感じかとても期待しました。練習は次の試合が大会屈指の左腕と対戦とあって、左投手を立てて、ランナー3塁と設定してシートバッティングをしていました。しっかり犠牲フライを打つことを徹底していたように思えます。その後は徹底してバッティング練習をしていました。暑い中選手ひとりひとりの素早い行動、気持ちいい声、規律正しい礼が徹底されたチームでした。二人の投手が投球練習していましたが、二人とも140キロ超の速球を投げ、とても迫力がありました。スピードもありコントロールもよく、変化球もよく切れる、本当に素晴らしい投手でした。なかなか長野県では見られない選手が多くてこの鹿児島実業高の練習見学は本当に貴重な機会でした。

今回の研修は、試合も含めたくさんの裏舞台を見ることができました。あらためて高校野球の運営にはたくさんの人に支えられて成り立っていることを実感しました。今回の研修の成果を少しでも生徒に還元し、生徒が少しでも成長するように努力していきたいと考えています。

監督研修報告書

白馬高等学校 柳澤 仁

第90回全国高等学校野球選手権記念大会の視察に参加させて頂き、そこで学んだことを報告します。

・投手

全国大会に出場しているチームの投手は球速にして135kmを超える投手がほとんどでストレートはきっちりコースに投げられるというのが絶対的な条件だと感じた。球速は140kmを超える投手も珍しくなく、地方大会のレベルとは少し違うと感じた。しかしそのレベルの投手でも簡単に打ち崩される場面も多く、ピッチングマシンがチームにあることが当たり前になりつつある今の高校野球では、球速だけでは勝ち抜けないことも感じた。

では勝ち残る投手の優れている点は何なのか見てみると、4つのことに気がついた。1つ目は同じ135kmのストレートを投げる投手でも、勝つ投手が9イニングその球速を維持しているのに対して、打たれる投手はイニングを追うごとに球速は下がっていき、9イニング通しての球速ではないこと。2つ目は勝つ投手はどんなカウント、どんな場面でも変化球で簡単にカウントを取れるということ。3つ目はバント処理や牽制球などの投球以外の技術に大変優れていること。4つ目はカウントを稼ぐ球種(コース)と決め球(コース)をしっかり持っていて、打ち取る(三振も含む)パターンを持っていることである。特に4つ目の打ち取るパターンを持っている投手はピンチの場面でも冷静な対応をしていた。そのパターンを読まれ始めると同じ球種でもボール球にして三振を取りにきたり、逆をつく配球に変えたりという工夫が見えた。

・守備

守りに関しては地方大会と比べると同じエラーでも捕球のエラーが非常に少ないと感じた。特に内野手はバウンドが合わない時でもしっかりとボールを見てグラブへ入れてしまう技術は高いレベルだと感じた。従ってエラーの8割以上が送球のエラーだった。肩の強い選手たちが多く、8割の力で十分な距離にも関わらず力いっぱい送球をしようとした際の暴投が目立ち、距離によつての使い分けが出来ればもっとエラーは減るのではないかと思った。

また外野手や捕手の肩の強さはやはり高いレベルで、盗塁やセカンドランナ

一がシングルヒットでホームインするためにはかなり良いスタートを切る必要があると感じた。

・ 打撃

打つことで一番感じたことはバッターボックスの中でフルスイング出来る選手が多いことだ。フルスイング出来るため、難しいコースを打ちにいくとファールとなり打ち直しとなる。投手は難しいコースに投げ続けることはできないので、甘く入ったボールを痛打される。またストレートを待っている打者が甘く入った変化球を簡単にヒットにできることも地方大会ではあまり見られないことだと思う。

またバントの技術はかなり高いと感じた。守備側がどんなにプレスをかけてきてもしっかり打球を殺したバントをできるため確実にランナーを送れていた。スクイズを多用するチームが多いが、失敗する場面はほとんどなく、かなり反復練習をしてきていることが見て取れた。

・ 走塁

走塁で感じたことは個々の走力はかなり高いということだ。地方大会と同じ定位置ではアウトにならないことが予想され、相手のデータをしっかりチェックし、足の速い選手のポジショニングは工夫する必要があると感じた。

その一方で判断力はどんなチームも鍛えられているというわけではなく、ケースやアウトカウント、点差や打順を考慮した走塁ができるチームは決して多くないように思う。

・ 試合までの流れ

試合に入るまでの準備の様子も見学させて頂いたが、一番感じたことが球場に入ってから遠投ができる機会(場所や時間)がないということには驚いた。特に投手はこの対策を考える必要があるかもしれないと感じた。